

経営者への活きた言葉

よい習慣が危機対応能力につながる 佐々木常夫(東レ経済研究所特別顧問)

1. 組織が危機を迎えた後に「危機だ、危機だ」と騒いでも始まらない。日頃からやるべきことをコツコツとやっておくのがリスク回避の定石であることを、今一度確認したほうがよい。事が起きてから動き始めると何もかも後手後手になるのは、今日の政府や東京電力の対応を見てもわかるだろう。
2. 「赤字だ」「外部環境の急変だ」と、危機を声高に叫ぶ経営者も社員も少なくはない。だが、それは本末転倒で、赤字になる前から、または環境が急変する前から備えておけば危機はやってこないのだ。「なんだ、当たり前じゃないか」と言うが、この当たり前をきちんとできる人がいかに少ないか。
3. 「これだけ備えているから大丈夫」「それほどの事態はめったにこない」と思ったら、それが油断である。日頃からあらゆる状況に備えておくこと。それが習慣になっていれば、危機は訪れないのだ。だからこそ、「よい習慣は才能を超える」。よい習慣は、危機対応能力にもつながる。どんな状況でも、つねにやっている人が勝つ。やらないと普段から差がついているもの。習慣化された人こそ、どんな時でも対応できる能力を備えているのだ。

(参考:「週刊東洋経済」2011年4月 9日号)

経営者のための危機管理

こんな会社は危ない

1. 危険な企業を察知するには、大別して二つの方法があります。一つは、決算書などのデータで企業を見る「定量分析」。もう一つは、数値化できない質を評価する「定性分析」です。
2. 危険な兆候チェックリスト
 - (1)社長 …①本業以外(公職、宗教、相場商品)に没頭している。
②豪邸を新築したり、会社の私物化が強まった。
③他人や専門化の意見・忠告を聞かなくなった。
 - (2)幹部 …①外出が増加したり、所在不明のことが増えた。
②役員間の対立、内紛、分裂、責任転嫁が起こっている。
③有能な人物が異動、退社した。
 - (3)外観・評判 …①正体不明の人間が頻繁に出入りしている。
②業界、同業者、近隣による悪評が立っている。
③掃除の不行き届き、汚れが目立つ。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2011年3月26日号)